

市街地における墓地の景観に関する研究

—東京都新宿区を対象として—

1G05J020-7 小野間 良*

Ryo Onoma

明治期の市区改正による幹線道路の新設、及び拡幅による土地収用や大正期の震災復興事業によって墓地を含む寺院境内地は市外移転を余儀なくされた。しかし多くの寺はそれらに応じずその土地に残り、大正 15 年東京府の「土地区画整理の施行による墓地の変更に關する件」の中で特設墓地の設置を条件として市街地においても墓地の設置が認められた。これにより現在東京都内において墓地は人々が活動的に生活する空間と隣り合うように存在している。本研究では、変化する都市の中で墓地がどのように存在しているのか、その実態を明らかにするため東京都新宿区の全ての墓地を対象として墓地の現状を把握し、どのような景観を有しているかを示した。外部から壁が存在する墓地を眺めた時に、壁の向こう側の空虚感を緩和するために必要となるのが緑の存在であるが、管理者の意識や墓地の整備によって緑を植えるスペースが失われているといった問題があることがわかった。

Key words : 墓地, 墓地と外部空間との境界部, 景観

1. 研究の背景と目的

1-1. 背景

日本においてまちを歩いていると塔婆がはみ出ているコンクリートの壁に出くわすことや、電車の中からまちを見下ろしていると住宅地の中に墓地がぽつんとあることに気付くことがある。このように墓地は人が生活する空間と隣り合って存在している。日本と文化の相似点の多い中国では人が生活している場所から離れた位置に墓地が置かれているという。この点において日本の墓地の存在スタイルは独特なものであると考えることができる。

日本において墓地は忌避施設として扱われる場面がある。それは賃貸アパートなどの不動産の価格が相場より少し安くなっているところから窺い知ることができる。人々に忌避施設として認識されながらも墓地は人々の生活圏内に位置することで隠れるように工夫された墓地があることや忌避施設としてのイメージをさらに強めるような墓地があることが考えられるが、墓地の実態が明らかになっていない。そこで現在墓地がどのようにまちの中に存在していてどのような特徴があるのか、またどのような具体的な問題があるのか調査・研究をする必要がある。

1-2. 目的

本研究では人々が生活する空間と隣接している墓地が多く存在する東京都新宿区を対象とし、どのように墓地がまちの中に存在しているのかを示し、どのような要素が墓地の周りに取り巻いていて景観的印象を左右しているのかを解明することを目的とする。また現在の都市空間における墓地の意義を探る。

2. 既存研究と本研究の位置づけ

2-1. 既存研究

墓地に関する既存研究は墓地政策の中での墓地の変遷に関する研究¹⁾や墓地に関する法制度、規定等に関する研究²⁾、納骨堂・墓苑の設計者の意識とデザインに関する研究³⁾、墓地に対する人の意識に関する研究⁴⁾、墓地の経営管理に関する研究⁵⁾、墓地の構造と機能に関する研究⁶⁾、が各々いくつかある。しかし人々の生活する空間内にある墓地の存在スタイルや特徴が示された文献や墓地の景観を扱った論文は見当たらなかった。

2-2. 本研究の位置付け

既存研究では現在存在する墓地の外観的な特徴や景観について示されたものはない。本研究では人々が活動的に生活するまちの中にある墓地を対象として、まずどのような特徴や景観を有した墓地が存在するかを示し、現状から墓地に起きている景観の問題を挙げ分析・考察をする。これは今までに研究されていなかった墓地研究であり墓地を含めたまちの魅力をさらに引き立てていくための一助となると考える。

3. 用語の説明

以下、本稿で用いる用語を定義する。

① 墓地

納骨堂は含まず、いくつもの墓が集まった集合体のこととする。また野外に存在するものとする。

② 寺併設墓地

寺に隣接して存在する墓地のことである。一方で寺併設でない墓地は寺に対して道を挟んだ所に位置しているものや寺が別

*早稲田大学理工学部社会環境工学科景観デザイン研究室 4 年

の地域にあるものなど、所有する寺と直接繋がっていないものとする。

③寺町

東京都内では寺院が集っている地区を「寺町」と称するのは困難なことが多い。従い、本論では江戸期に関わる説明の際や伝統的な雰囲気あるいは景観の一体感が明瞭な場合に限定的に用いることとする。

④寺院集積地区

丁目当り 4 箇所以上の寺院が集っている地区のこととする。

⑤道

車が通れる以上の道幅を有している道のこととする。路地は除外して考える。

4. 研究方法

4-1. 研究方法の手順

以下の順序で研究を進めていく。

①対象地の抽出・墓地の歴史の変遷の把握

市街地に墓地が多く存在することを第一基準として対象地を選定する。また対象地の墓地の歴史の変遷を把握する。

②地図調査

地図の読み取りによる墓地と周辺空間との関係を把握し大きく墓地のタイプを分類する。

③プレ現況調査

新宿区に存在する墓地にどのような特徴があるのか、外から墓地を眺めた時、壁や緑などからの影響による印象の違いを把握し、本調査における指標を決定する。

④本調査

117 箇所の墓地をプレ現況調査によって得た指標により調査を行う。また個々の墓地の特徴や気付いたことを記録する。

⑤分析

地図調査と本調査から得たデータを基に墓地のタイプ分類を行う。また、墓地のタイプ毎に分析を行う。

⑥考察・問題解決策の提案

分析結果を基に墓地の特性を考察する。同じ墓地のタイプでも壁の色や綺麗さ、緑の多さなどの違う部分から印象の違いを示し、墓地を含めた良い景観づくりに必要な要素を見つけ墓地の景観的な問題の解決策の提案を行う。また本調査により気付いたことを墓地の管理者(寺の住職)へのヒアリングを通して調査する。

5. 対象地の抽出

5-1. 対象地の選定

本研究では、東京都新宿区に存在する全ての墓地を調査対象とする。選定理由は人々の生活圏内にある墓地を調べたいという本研究の目的に照らし、新宿区に存在する墓地の全てが

住宅や商業施設と隣り合っていること、及び地形のバリエーションが豊富で墓地の存在の仕方にも多様な形態があることが期待でき、対象エリアとして適当であると考えたからである。調査対象である墓地の一覧を表 5-1 に示す。

5-2. 新宿区における墓地の分布と基礎情報

新宿区には現在 117 箇所(公営:1、法人:115、共用:1)の墓地が存在する。その分布を図 5-1 に示す。墓地の分布は新宿区の東側に多いことや集中している所と分散している所に分かれていること、また等高線の幅が狭い所に集中していることがわかる。墓地の属性からみると法人の墓地のうち寺併設でない墓地は 13 箇所ある。ほとんどの寺併設でない墓地は道を挟んだ所に存在していて、非常に近い所に存在している。しかし寺と離れて存在する墓地もあり、寺が新宿区内にない墓地は中央区に寺がある大安楽寺境外墓地の 1 箇所であった。

表 5-1. 調査墓地一覧

番号	名称	宗派	番号	名称	宗派	番号	名称	宗派	番号	名称	宗派
1	自性院	真言宗	31	法正寺	浄土宗	61	幸国寺	日蓮宗	91	正徳寺	浄土真宗
2	蓮工院	真言宗	32	南蔵院	真言宗	62	長光寺	曹洞宗	92	西遊寺	浄土宗
3	最勝寺	真言宗	33	清隆寺	日蓮宗	63	全蔵寺	曹洞宗	93	全勝寺	曹洞宗
4	光徳寺	真言宗	34	光臨寺	浄土宗	64	経王寺	日蓮宗	94	徳寺	曹洞宗
5	龍泉寺@馬場	真言宗	35	長泰寺	曹洞宗	65	常楽寺	日蓮宗	95	日蓮寺	日蓮宗
6	日蓮寺	真言宗	36	洞雲寺	日蓮宗	66	瑞光寺	日蓮宗	96	西成寺	浄土真宗
7	常泉院	日蓮宗	37	多助院	真言宗	67	長昌寺	曹洞宗	97	西交寺	浄土宗
8	常内寺(内)	日蓮宗	38	淨輪寺	日蓮宗	68	浄栄寺	浄土真宗	98	宗徳寺	曹洞宗
9	常内寺(外)	日蓮宗	39	南春寺	浄土真宗	69	長蔵寺	浄土真宗	99	信壽院	浄土宗
10	龍泉院	真言宗	40	宗柏寺	日蓮宗	70	蓮秀寺	日蓮宗	100	蓮樂院	真言宗
11	法輪寺	日蓮宗	41	大願寺	浄土宗	71	月桂寺	臨済宗	101	慶楽院	真言宗
12	宝泉寺	天台宗	42	林氏墓地		72	法善寺	日蓮宗	102	妙行寺	日蓮宗
13	放生寺	真言宗	43	常敬寺	浄土真宗	73	専福寺	浄土真宗	103	法蔵寺	浄土宗
14	大安楽墓地	真言宗	44	宗門寺	浄土宗	74	専念寺	浄土宗	104	東福院	真言宗
15	観音寺@早稲田	真言宗	45	緑雲寺	浄土真宗	75	西光庵	浄土宗	105	真美寺	浄土真宗
16	京朝院	日蓮宗	46	正法寺	日蓮宗	76	永福寺	曹洞宗	106	日宗寺	日蓮宗
17	玄国寺	真言宗	47	誓願寺	浄土宗	77	観音庵	曹洞宗	107	祥山寺	臨済宗
18	共用墓地		48	来迎寺	浄土宗	78	善慶寺	浄土真宗	108	長安寺	浄土宗
19	済松寺1	臨済宗	49	清源寺	浄土宗	79	安養寺	浄土宗	109	正覚寺	日蓮宗
20	済松寺2	臨済宗	50	妙泉寺	日蓮宗	80	天龍寺	曹洞宗	110	顕徳寺	真言宗
21	龍雲寺1	浄土真宗	51	本松寺	日蓮宗	81	正覚院	浄土宗	111	法恩寺	日蓮宗
22	龍雲寺2	浄土真宗	52	成通寺	日蓮宗	82	成徳寺	浄土宗	112	心光寺	曹洞宗
23	宗満寺	浄土宗	53	龍祥寺	曹洞宗	83	本宗寺	浄土宗	113	勝興寺	曹洞宗
24	宗満寺	曹洞宗	54	長泉寺	日蓮宗	84	福慶寺	浄土真宗	114	本竹寺	日蓮宗
25	長泉寺	曹洞宗	55	大龍寺	曹洞宗	85	真長寺	曹洞宗	115	浄蓮寺	浄土宗
26	田中寺	曹洞宗	56	康全寺	浄土宗	86	長壽寺	浄土宗	116	本流寺	日蓮宗
27	徳久寺	浄土真宗	57	常立寺	日蓮宗	87	養国寺	曹洞宗	117	林光寺	浄土真宗
28	龍門寺	曹洞宗	58	椿徳寺	浄土真宗	88	全長寺	曹洞宗			
29	長源寺	曹洞宗	59	康行寺	浄土真宗	89	浄蓮寺	浄土宗			
30	大信寺	浄土宗	60	法身寺	臨済宗	90	法雲寺	浄土真宗			

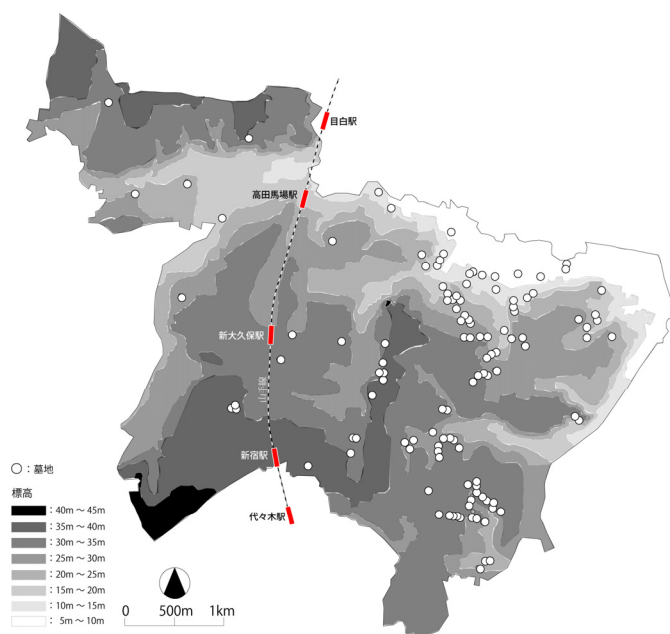


図 5-1. 新宿区の地形図と墓地の分布

6. 東京における墓地の歴史的変遷

鎌倉時代まで墓地空間の存在は都市から排除される性格であったが、鎌倉時代以降に新興仏教の隆盛を背景に寺の境内空間と共に都市の中に取り込まれていった。江戸時代になると寺院境内地と墓地は、寺町として都市の中に明確に位置付けられるようになり祭りや市が開かれ市民にとってのレクリエーションの場であった⁷⁾。しかし明治期に入り、墓地や寺院境内が都市の中から排除されるようになる。その変遷は市区改正、震災復興、戦災復興を中心に三つの時期に分けられて考えられている⁸⁾。

1. 東京市区改正条例～大正前期

江戸期に築かれた寺町は明治期に入ってからしばらくの間は変化なく存在した。しかし伝染病が流行した時代背景があり、明治17年「墓地及び埋葬取締規則」と「墓地及び埋葬取締規則施行方法細目標準」により都市環境・衛生上の観点から寺院付属墓地の新設禁止と市外移転の方針が取られた。また明治22年「東京市区改正設計」により東京の基盤整備が始まり、幹線道路の新設や道路拡幅による土地収用により墓地を所有する寺は境内地を削られることを余儀なくされた。その時、寺は境内地に墓地の新設を許可されず東京市の郊外に代替地を求めることになるが、墓地と離れることは寺の経営維持の上で根幹に関わるという理由で多くの寺が墓地と共に郊外に移転することになった。明治36年「元寺院境内共葬墓地移転方ノ件」において寺が所有する墓地を市外に移転改葬した場合はその跡地を無償下付するとして墓地移転奨励策が取られた。

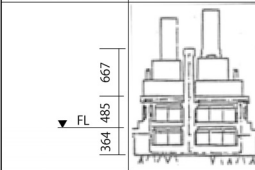
2. 大正後期(関東大震災以降)～昭和初期(戦前)

大正12年の関東大震災により都心部と下町のほぼ全域が焦土と化し、帝都復興事業において下町を中心に土地区画整理事業が行われた。寺は換地以外の土地に移ると境内は国の所有に帰するため区画整理地区内に留まらざるを得なかったが、換地によりその面積が減少して寺の活動や存立に支障を来す場合が多く、区画整理地区内への編入を拒否せざるを得なくなった。大正14年「特別都市計画区域内ニ於ケル寺院ニ国有境内地譲与ニ関スル法律」により換地以外の土地に移る際はその換地を移転費用捻出のため無償譲与するとして境内を強制的に区画整理地区へ編入する方策が取られたが、郊外において既に市街化が進んでおり寺の希望する規模の用地の取得が困難であり行き詰まった状態になった。大正15年に東京府は「土地区画整理の施行による墓地の変更に關する件」を出し衛生上・美観上、相応の整備をすれば換地を墓地としても良いと認めるもので、ここに改葬後の面積が3分の1に縮小可能となる特設墓地(表6-1)を提案し、寺はそれを受け入れた。特設墓地を契機として、寺院境内墓地は移転する代わりに市街地内で小規模化・集約化できるものとして多くの寺は市街地内に留まり続けた。

3. 昭和後期(戦後)

終戦を迎え昭和20年「戦災地復興基本方針」が閣議決定され、これに基づき東京の復興計画が策定された。しかしその後、昭

表6-1.特設墓地⁷⁾

	特設墓地	
設立年	1925	
一基当りの面積 (m ²)	0.36 ~ 1.0	
一基当りの納骨数	4 ~ 6	
床盤面	コンクリート舗装	
納骨面の位置	地盤面以上	
設計理念	墓地の縮小・集約化	
		写真：南禅寺墓地
		コンクリートで舗装され、また墓石の間隔が狭いため緑の余地がなく無機質な墓地空間になっている。

和24年「戦災地復興都市計画再検討に関する方針」として事業範囲の縮小、打ち切りが行われた。こうした戦災地復興事業は震災復興事業と比べ寺院境内に対する全体的な影響は与えてない。区画整理事態はその大部分は震災復興時に行われていたからである。

7. 地図調査による墓地のタイプ分類

7-1. 地図調査の概要

墓地と周辺空間との繋がりを調べるために東京都2500デジタルマップ地形図画像とgoogleマップの航空写真を利用する。そして墓地と周辺空間との繋がりにどのようなバリエーションがあるのかを繋がりのパターン毎に分け墓地のタイプとして示す。

7-2. 地図調査による墓地のタイプ分類

地図調査による墓地のタイプ分類を表7-1に示す。(表7-1はフィールド調査の結果も含めてまとめたものであるため地図調査以上の情報がある。) 墓地はいくつかの境面で周辺空間と接しているため、1つの墓地でも外部との繋がりタイプを複数有する。その1つひとつの境界面において、はじめに地図上から墓地の境面に沿って道が存在するか、しないかの2つに大別する。墓地の境面に沿って道が存在しないタイプを非接道タイプと称し、道が存在するタイプを接道タイプと称す。地図上では接道タイプに関して、段差が見えないため地図上からそれ以上分けることはできなかったが、非接道タイプに関しては3つに分けることができた。

1) 非接道タイプ

墓地の周辺に公園や住宅地、駐車場が張り付いて存在し、道と面していないものである。また3つのタイプに分かれる。

①建物密集地・路地型

このタイプは以下のように2つに分けられる。

①-1. 道幅の狭い道が墓地に沿って存在するタイプ

①-2. 建物への連絡通路が墓地に直面するタイプ

墓地の周りに建物が密着しているように迫っているが、辛うじて境面に細い通路が面しているタイプである。

②駐車場、公園隣接型

住宅などの建物と隣接していることは勿論、駐車場や公園と隣り合っているタイプである。

③隔離型

完全に寺、周辺の建物に囲まれていて周辺から墓地を窺うことができないタイプである。

2) 接道タイプ

広く道に接しているタイプであり、墓地外部の公共的な空間との繋がりが強い。接道タイプから現況調査によりさらにタイプが枝分かれする。

8. 現況調査による墓地のタイプ分類と分析・考察

8-1. プレ現況調査による指標の決定

平坦な地形に位置する墓地として喜久井町、榎町、凹凸のある地形に位置する墓地として若葉、須賀町のいくつかでプレ現況調査を行った(平成 20. 7 月、10 月)。そこで、墓地と周辺との高低差や壁の素材、色、デザインに相関性が見られることがわかった。これらのことを含め、墓地タイプの詳細データの収集を目的として境界部の緑の多さや墓地内部の緑の有無、接道タイプに対して接する道路の広さ、建物密集地・路地型に対して壁の情報だけでなく建物の入口の有無、壁があるものに対して壁の上に見えるものを記録することとした。

8-2. 墓地タイプと分析

現況調査によって得られた墓地の分類を表 7-1 に示し、各タイプの分布を図 8-1、8-2 に示し、件数と特徴の傾向を表 8-1 に示す。地図調査でわからなかった接道タイプは段差や壁の詳細情報により 3 つに分けることができた。よって計 6 つのタイプに新宿区内の墓地が分けられる。そこで墓地の分類の注意として、1 つの墓地として隔離型は独立したものであるが、建物密集地・路地型と駐車場、公園隣接型は他のタイプと重複して存在するケースがある。例えば、ある面では接道タイプであるのに対し、他の面では建物密集地・路地型である場合がある。本研究ではこのような場合、その墓地は両タイプを有していると考えタイプ毎の分析・考察の際、それぞれの面を扱う。以下、各墓地タイプの特徴と課題・展望を述べる。

1) 非接道タイプ

① 建物密集地・路地型

【特徴】 墓地の周りに建物が密集しているために、已む無く建物への連絡通路が境界部につくられたものがこのタイプである。そのため路地に向かい建物の入口が存在する。人の生活空間がとても近くにあるにも関わらず、壁の上から卒塔婆や墓石が飛び出しているため墓地を意識させる路地空間となっている。ま

表 8-1. 各墓地タイプの件数と特徴的傾向

	墓地タイプ	件数	規模	宗派	立地特性	緑の量	境界のデザイン
非接道タイプ	①建物密集地・路地型	19	—	—	建物密集地内の内側部分	墓地の外側に少々(近隣住民の植栽等)	明度の低いコンクリートの壁
	②駐車場・公園隣接型	24	—	—	大通りから少し外れた場所	ない墓地が多数だが、多い墓地は茂る程ある	コンクリートの壁、網フェンス
	③隔離型	28	小	—	寺院集積地区、墓地同士隣り合う場所	多い墓地と少ない墓地の差がある	壁や緑が存在、墓が境界に近接
接道タイプ	④平坦・壁型	46	—	—	大きな段差がない場所	少ない	コンクリートの壁
	⑤段差有・高壁型	5	—	—	斜面上、最高の段差が2m以内	基本的に緑はない	擁壁の上に垂直に壁が立つ
	⑥段差有・墓剥き出し型	12	—	—	斜面上、最高の段差が2m以上	基本的に緑はないが、あっても墓地を外部から確認できる	囲いが欄であるため墓地内部が丸見え

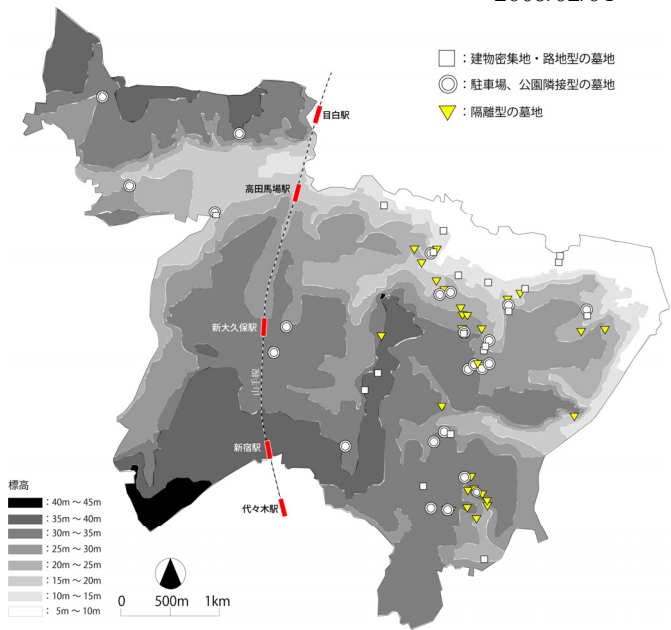


図 8-1. 非接道タイプの墓地の分布図

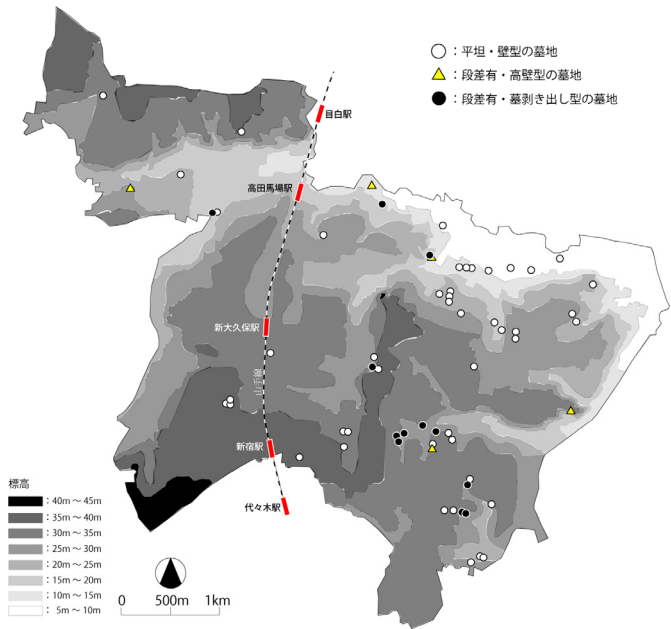


図 8-2. 接道タイプの墓地の分布

た住宅の玄関が路地に面しているところでは鉢植えの花を置く(図 8-3)などしているところから、墓地を目の前に住んでいる住民の墓地を意識させないように路地を綺麗に見せようとする努力を



図 8-3. 観音寺(早稲田)

※ —: 傾向が見られなかった

【課題・展望】道の幅が狭い故に壁のデザインに路地のイメージが支配される傾向にあると感じた。図8-3と図8-4を見比べれば一目瞭然である。図8-4は壁が黒ずみ路地に対しても暗い印象を受ける。このタイプは明度の低いコンクリートの壁が多く見られたので建物側の色に配慮して壁の色、デザインを考えるべきである。

②駐車場、公園隣接型

【特徴】住宅地や駅の近くで大通りから離れた場所に見られる。駐車場空間では墓地が丸見えであったり卒塔婆や墓石が壁の上から見えたりと墓地を意識させる傾向にあった。しかし墓地に面する道からでは角度や緑の茂り具合(図8-5)、距離の関係で墓地を把握することは難しい。公園空間では墓地を意識させる明度の低いコンクリートの壁ではなく、柵にモザイクの効いた光を通すプラスチック性の板を重ねる例や、コンクリートの壁であるが公園に木の間隔を合わせている例があり墓地は公園と同調して馴染んでいる。

【課題・展望】道から墓地を眺めた場合、墓地を把握できないため忌避施設としての墓地を考えるにおいて問題はない。しかし住宅が密集している地域において道が狭く雑然としているためわかりにくいという問題があり、そこで墓地がランドマーク的な存在になり得る。そこでランドマーク性を高めるために墓地であることを出して良いと考える。

③隔離型



図8-4. 観音寺(高田馬場)



図8-5. 養国寺

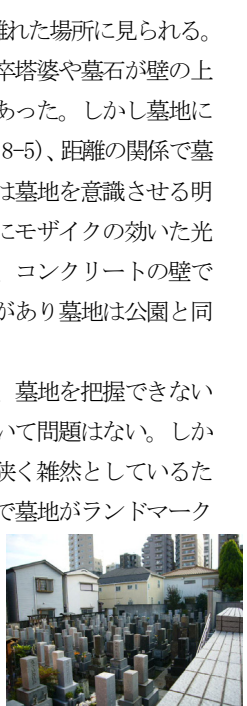


図8-6. 積徳寺

【特徴】寺院集積地区で墓地同士隣り合って存在する。寺に参道があるため隣接する建物より道路から見て後ろ側に寺が建ち、寺の横や後ろに墓地があるため建物の後ろ側に隠れて存在する。また墓地への狭い通路(図8-7)



図8-7. 経王寺

が存在する。墓地の内部景観は住宅の普段見ない裏側(玄関側ではない面)がたくさん墓地に張り付いているため、また一定の高さの建物に囲まれているため圍繞感があり、不思議な空間になっている。寺院境内に傾斜はなく平坦である。

【課題・展望】敷地が広い墓地では緑が多いが、敷地が狭い墓地では緑が少なく、また墓石の密度が高くとても無機質な空間となっていた。これには墓基の配置が整理されていない墓地が多く、配置の整理による空きスペースの確保によってその空いた部分に植栽を施し、緑を増やすことによって解決することができると考える。また墓地への連絡通路の入口がわかりづらいため、寺院境内の案内図があるとわかりやすい。

2)接道タイプ

④平坦・壁型

【特徴】大きな段差のない所に位置し、寺院境内に傾斜、段差がない。外壁は一樣な明度の低いコンクリート塀でそれが長距離に亘って続くため外観は暗く整然としている。また壁で覆われているため中に何があるかわからず、墓地の周囲にある建物の側面が墓地空間に対して距離感や奥行をもたせ、結果として壁の向こう側に何があるのか気になることがある。この壁と周囲の建物が齎す人の感覚を空虚感と呼ぶこととする。またこの外部景観が平坦・壁型の



図8-8. 本迹寺

表7-1. 墓地タイプ一覧

非接道タイプ				接道タイプ			
住宅の密集地に墓地が存在し、外側の住宅は墓地側に玄関が置かれ、このタイプの狭い通路は主に住宅への連絡通路として利用されていることがわかる。		墓地を建物を取り囲んでいることで墓地側の建物の連絡通路がこのように墓地の壁に垂直に面する形でつくられている。よってこの通路は主に建物の利用者に利用されていることがわかる。		目線よりも高い壁が広がり中にあるものが見えず周辺の建物が見え空虚感を持つ(写真10)。写真9のように墓地内部に木があること、また木の配置により空虚感が緩和されると考える。		壁が緑であるため、コンクリートの壁より壁の後ろに對する空虚感を持たなかった。また光が抜けるため壁が明るいので、壁という重苦しい印象は持たなかった。	
写真1. 浄輪寺	写真2. 法正寺	写真3. 西光庵	写真4. 田中寺	写真9. 常円寺	写真10. 法蔵寺	写真11. 傳久寺	写真12. 西念寺
1-1道幅の狭い道が墓地に沿って存在しているタイプ		1-2建物への連絡通路が墓地に直面しているタイプ		4-1コンクリートの壁タイプ		4-2緑を利用した壁タイプ	
①建物密集地・路地型				④平坦・壁型			
駐車場や公園に面している道から墓地を眺めた時にそこに墓地があることを確認することが難しい。しかし駐車場や公園の境部分に寄ると塔婆が見えたり墓地が見えたりと全く確認できなかったり様々である。駐車場や公園から墓地への連絡通路はない。		写真7は入り口から寺を眺めた写真で、そこからは寺が大きく見える。寺の横の細い通路を抜けると写真8の景色が広がっている。墓地空間が前面建物に囲まれていて外側から墓地を窺うことができない。		擁壁部分が2m以内である場合、擁壁部の上に墓地が見ないように壁が立っている。このタイプは壁自体が綺麗に舗装されていてそこに墓地があることを感じさせない印象を受けた。		擁壁部分が2m以上の場合、墓地が見えるような柵または壁が存在しない。墓地は柵がある場合道側を向き、柵がない場合は墓地内側を向いている。	
写真5. 月桂寺	写真6. 円通寺	写真7. 日宗寺1	写真8. 日宗寺2	写真13. 天龍寺	写真14. 長泰寺	写真15. 眞英寺	写真16. 全長寺
②駐車場、公園隣接型		③隔離型		⑤段差有・高壁型		⑥段差有・墓剥き出し型	

【課題・展望】墓地を囲う壁は全てが一樣で非常に無機質である。図8-9に示すようにコンクリートの壁に窓が付いていて中を覗けるようになっている。覗いて中を見ることによる墓地内部の認識と行動による記憶作用が場所を記憶し、



図8-9. 林氏墓地

また外部から墓地空間を楽しむということに繋がる。そうなることで平坦・壁型の墓地はランドマーク性を高められ、また覗くことを楽しむという観点からレクリエーションという価値を齎すことができると考える。現在、墓地が閉じている空間であることに對して大変勿体無いと強く思っている。

⑤段差有・高壁型

【特徴】図8-2より等高線の間隔が特に狭い場所に位置し、傾斜の大きい所にあることがわかる。墓地が高い位置にあるとして、墓地空間と周囲の道との最も大きいレベルの差は2m未満のもので、擁壁の上に垂直に墓地空間を囲う壁が存在するものがこの段差有・高壁型である。総じて壁が高く、明度が高く周囲との調和が取れている場合、墓地が壁の向こう側にあることが全くわからない。

【課題・展望】正応寺は段差が2m以上でありながらも段差有・高壁型である。2m以上の擁壁の上に約1.8mの壁が加わり面している道を歩いている人に対し



図8-10. 正応寺

て圧迫感を与えるばかりか、災害時には壁が崩れ大惨事を招く可能性が非常に高い。そのため2m以上の場合でコンクリートの壁が存在する正応寺は危険であると考え高くなく、また重くなく、崩れにくい囲いに替える必要がある。

⑥段差有・墓剥き出し型

【特徴】図8-2より等高線の間隔が狭い場所に分布し、傾斜の大きい場所に存在することがわかる。墓地に面する道との最高の段差が2m以上である場合に、墓地の囲いがコンクリートではなく柵状、または囲い自体存在せず外部から墓地が丸見えであるのが段差有・墓剥き出し型である。境界部に囲いが存在しない場合は道に対して墓石は墓地空間の内側を向き、囲いが存在する場合は道方向を向いている。墓地の仰観景はとてもダイナミックでインパクトがある。そのため墓地であるため忌まわしい存在であるが、ランドマーク性が非常に高い。墓地内の日当たりが良く、また墓地空間からの見晴らしが良い。

【課題・展望】墓地が大胆に見えることが忌避される立場の墓地としての根本的な課題であるだろう。しかし筆者はこの景観を問題があるとして捉えず、市街地の中で墓地がランドマークとして働いていると考え、元来持っていた死者との対面という精神的な墓地の価値に加えられる新たな価値であると考え。

8-3. 現地調査よりわかったこと

墓地のタイプ分類のところで述べたこと以外で現地調査より以下のことがわかった。

- ・ 墓地の省スペース化による緑の減少
- ・ 浄土真宗の墓地でも卒塔婆を立てる墓が存在すること

現在墓地で起こっている問題としてあるのが、墓地が整備されることによる緑の減少である。1つひとつの墓の面積が小さく小型化され庭の部分はなく小さい木すら植えることができない。また床もコンクリートで舗装されているため土すら見ることがない(表6-1写真)。この特設墓地の設置が条件で墓地は新宿区内に残っているので当然のことである。しかし新宿区内には墓と墓との間隔が広く緑が茂る墓地もいくつか存在する(図8-11)。



図8-11. 月桂寺

仏恩報謝の思想で卒塔婆を立てない浄土真宗であるが、卒塔婆を立てる墓地も存在した。理由は寺の収益を上げるためであること(宗派の壁を無視して檀家を増やすこと)である。また墓地を持っている寺が所有している土地を利用して駐車場にしたり賃貸住宅にしたり、賃貸住宅から墓地に戻したりと需要を見ながら寺は収益を上げるための努力をしている。

9. 総括

9-1. まとめ

墓地は人の生活する空間に接するように存在していた。境内の緑のことや墓地と周辺空間との境界部について寺として考えていることはヒアリング調査から特にないことがわかり、これから景観を意識して改善していくことが求められる。またまちのわかりにくさを解決するランドマークとしての役割を担う可能性が墓地にはある。そのためには忌避されている空間であるという考えのみでコンクリートで全面を囲うのではなく、敢えて壁に開口部を設け覗ける、見せるという試みがあつて良いと強く思う。現状は墓地があることに気付かず面白味はない。

9-2. 今後の課題

- ・ 平坦・壁型の項で述べた「空虚感」を何の基準をもって定義付けることができるか示し空虚感の操作方法を模索する。
- ・ 墓地に接している住宅に住む人の墓地に対する意識調査をすることによる人の意識と墓地空間との関連性を把握する。

【参考文献】

- 1) 千葉一輝(1994)：「東京の寺町に関する研究 その9. 東京における寺院墓地の変遷」, 日本建築学会学術講演梗概集F 都市計画 建築経済・住宅問題 建築歴史・意匠 Vol. 1994, Page675-676
- 2) 安藤慶洋(2002)：「緑地空間のあり方 都市施設としての墓地の現状と課題」, 日本建築学会学術講演梗概集F-1 都市計画 建築経済・住宅問題 Vol. 2002, Page635-636
- 3) 山田明宏(1999)：「納骨堂・墓苑に対するその設計者の意識とデザインモチーフについて」, 日本建築学会学術講演梗概集E-1 建築計画 Vol. 1999, Page499-500
- 4) 斎藤竜司(1994)：「墓地提供者及び建墓者の墓地に対するイメージについて」, 日本建築学会学術講演梗概集E 建築計画農村計画 Vol. 1994, Page767-768
- 5) 長江聡子(2007)：「持続可能な墓地再生と墓地統括管理システムの研究-宮崎市宮地・都立青山霊園再生を中心として-」 都市計画論文集(CO-ROM) Vol. 42, No. 1, Page25-31
- 6) 吉田健雄(1994)：「東京の寺町に関する研究 その10. 東京都心部の寺院特設墓地について」, 日本建築学会学術講演梗概集F
- 7) 龍台男(1993)：「東京都心部の寺院特設墓地に関する研究-市街地における寺院境内・墓地論」, 修士論文
- 8) 千葉一輝(1997)：「東京の寺院集積地区(寺町)に関する研究 その1 近世以降における寺院集積の変容について」, 日本建築学会計画系論文集 第491号, Page149-156